



監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

29

短篇
上



大衆文学大系 29 短篇集・上

昭和四十八年九月二十日 第一刷

著者 三遊亭圓朝ほか

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二二
電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

©伊藤光夫ほか

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

時代小説

三遊亭圓朝

高桑義生

文七元結

九

甚内大悪心

四

伊藤痴遊

白柳秀湖

板垣の遭難

一〇

宮本武蔵と烏猫

三

長谷川時雨

小泉長三

マダム貞奴

三

恋の魔ヶ池

五

江見水蔭

橋爪彦七

初鱒献上記

六

哀艶修羅道

一五

潮山長三

半井桃水

五月闇聖天呪殺

七

順礼仇討

二〇

伊藤銀月

中澤至夫

女から武芸へ

二六

浪人旅

二〇

湊邦三

平野零兒

藤馬は強い

二六

袴垂夜襲

二三

佐文字雄策

穂積驚

浪人弥一郎

二六

下駄ッ八仁義

二三

白石實三

井上靖

武蔵野から大東京へ

二六

流転

二〇

陣出達朗

宮本幹也

さいころの政

二六

渋柿

二五

陸直次郎

藤島一虎

千両胴

二五

示現流始末記

二〇

番伸二

開化チャリネ囃子

三三

鳴山草平

極楽剣法

三〇二

野澤純

南條三郎

利根の朝霧

アダムスの妻

三三

三三

真鍋元之

草薙一雄

丹次妙見詣り

足柄峠

三三

三〇

大池唯雄

岩下俊作

秋田口の兄弟

無法松の一生

三三

三三

榊山潤

笹本寅

土佐人文記

会津士魂

三三

三〇

高橋鐵

大林清

天童殺シ痛恨記

士族移民隊

三三

三三

田岡典夫

シバテン榎文書

巻

小山寛二

皇魂賦

巻

納言恭平

大江戸二人娘

巻

戸伏太兵

だんびら祭

巻

片岡貢

小栗主従

巻

大平陽介

梅花劍法

巻

現代小説

柳川春葉

泊り客

巻

澤田撫松

足にさわった女

巻

松崎天民

倫落の女

巻

生方敏郎

寡婦の恋

巻

大泉黒石

毛皮の禪

五

貴司山治

忍術武勇伝

五

岡本一平

下村千秋

泣虫寺の夜話

五

天国の記録

五

石上欣哉

中村正常

酒井米子—女優情史—

五

超現実派の花嫁

五

辰野九紫

寺尾幸夫

青バスの女

五

鯛ちり

五

解説

五

略歴

五

時
代
小
說

文七元結

三遊亭圓朝

一

さてお短いもので、文七元結ぶんしちもとゆいの由来という、ちとお古い処のお話を申し上げますが、只今と徳川家時分とは余程様子の違いました事で、昔は遊び人というものがございましたが、只遊んで暮して居ります。よく遊んで喰って往かれたものでございませう。何うして遊んで暮しがついたものかという、天下御禁制の事を致しました。只今ではお敵しい事でございまして、中隠れて致す事も出来んほどお敵しいかと思ひますと、麗々と看板を掛けまして、何か火入れの賽がぶら下って、花牌はなぱいが並んで出ています、これを買って店頭みせもとで公然ごうぜんに致しておりましたも、樂みを妨げる訳はないから、少しもお咎めはない事で、隠

れて致し、金を賭けて大きな事をなさり、金は沢山あるが退屈で仕方がない、負けても勝つても何うでも宜いと、退屈しのぎにあれをして遊んで暮そうという身分のお方には宜しゅうございませうが、其日暮しの者で、自分が働きに出なければ、喰う事が出来ないような者がやりますと、自然商売が疎うすまがになります。慾徳よくとくすくゆえ、倦きが来ませんから勝負を致し、今日で三日続けて商売に出ないなどという事で、何うも障りになりますから、敵なまけものしゅう仰しやる訳で、併し賭博を致しましたり、酒を飲んで怠惰なまけもの者で仕方がないというような者は、何うかすると良い職人などにあるもので、仕事を精出して為さえすれば、大して金が取れて立派に暮しの出来る人だが、惜い事には怠惰者だと云うは腕の好い人にございませうもので、本所の達磨横町に左官の長兵衛という人がございまして、二人前の仕事を致し、早くって手際が好くって、塵ちり塵ちりなどもすつきりして、落雁らくがん肌はだにむらのないように塗る左官は少ないもので、戸前とまへ口くちをこの人が塗れば、必ず火の這入るような事はないというので、何んな職人が藏を拵たもとえまして、戸前口だけは長兵衛さんに頼むというほど腕うでは良いが、誠に怠惰なまけものものでございませう。昔は、賭博に負けると裸体で歩いたもので、只今はお敵しいから裸体どころか股引も脱る事が出来ませんけれども、其頃は素裸はだか体ていで、赤合羽などを着て、「昨夜はからどうもすっぱり剥はれたと自慢こぼに為ていとしまし、仕方なく十一になる女の子の半纏を借りて着たが、余程短く、下帯の結び目が出ていますが、平気な顔をして日暮にほんやり我家へ帰って参り、長「おう今帰ったよ、お兼……おい何うしたんだ、真暗まがくらに為て置いて、燈火でも点けねえか……おい何処へ往つてるんだ、燈火を点けやアな、おい何処……其処そこにいるじゃアねえか。兼「あゝ此処ここにいるよ。長「真暗まがくらだか

ら見えねえや、鼻ア撮まれるのも知れねえ暗え処にぶっ坐ッてねえで、燈火でも点けねえ、縁起が悪いや、お燈明でも上げよ。兼「お燈明どこじゃアないよ、私は今帰ったばかりだよ、深川の一の鳥居まで往って来たんだよ、何処まで往ったって知れやアしないんだよ、今朝宅のお久が出たっきり帰らねえんだよ。長「エ、お久が、何処え往ったんだ。兼「何処へ往ったか解らないから方々探して歩いたが、見えねえんだよ、朝御飯を喰べて出たが、それっきり居なくなってしまうて、本当に心配だから方々探したが、いまだに帰らねえから私はぼんやりして草臥れけえって此処にいるんだアね。長「ナ……ナニ知れねえ、年頃の娘だ、え、お久、いくら温順しいたつてからに悪い奴にでもくつついて、え、お久、智慧え附けられて好い氣になつて、其男に誘われてプイと遠くへ往くめえもんでも無え、手前はその為留守居をしているんじやアねえか、氣を付けてくれなくっちゃア困るじやアねえか。

一一

かね「留守居をして居るつたつて、斯んな貧乏世帯を張つてから、使に出す度一緒に附いては往かれませんよ、だが浮氣をして情夫を連れて逃げるような娘じやアありません、親に愛想が尽きて仕舞つたに違いないんだよ、十人並の器量を持つて、世間では温順しい親孝行者だといわれているのに、お前が三年越し道楽ばかり為て借金だらけにしてしまい、家を仕舞うの夫婦別れをするのという事を聞けば、あの娘だつて心配して、あゝ馬鹿々々しい、何時までも親のそばに喰附いてれば生漕うだつはあがらないから、何処へか奉公でもするか、何んな亭主でも持つ方が、襦袢を着てこんな真似をしてこんな親に附いて居ようより、一層の事好い処へ往つて仕舞おうとお前に愛

想が尽きて出たのに違いない、あの娘が居ればこそ永い間貧乏世帯を張つて苦勞をしながらこう遣つていたが、お久が居ないくらいなら私は直に出て往つちまうよ。長「お久が居なけりやア此方も出て往つちまわアな、だからよう、己が悪いから連れて来て呉んな、父が悪いッて是から辛抱するから、え、おい、お願えだ、己だつてポカリと好い目が出れば、又取返して、子供に着物の一枚も着せてえと思つて、ツイ追目に掛つたんだが、向後もうふつり賭博はしねえで、仕事を精出すから、何処へか往つてお久をめつけて来てくんナ。かね「めつけて来いだっていいよ。長「いねえと云つたつて何処か居る処え往つてめつけて来やアな。かね「居る処が知れてくるくらいなら斯様な心配はしやアしない、お戯けでないよ、私もお前のような人の傍には居られないよ。長「居られねえつたつて……え、おい、お久を何うかして……。かね「何う探しても居ないんだ。長「居ねえつて……え、おい、かね「お前の形は何んだね、子供の着物なんぞを着てさ、見つともないじやアないか。長「見つともねえつたつて、竹ん処のまい坊の半纏を借りて来たんだ。かね「お尻がまるで出て居るよ、子供の半纏なぞを着て、好い氣になつて戸外をノソノソ歩いてよ。とグズグズ云つて居ると、表の戸をトン／＼叩き、男「御免ください。かね「はい只今開けます……誰か来たよ、お前隠れ場が……仕様がなないねえ。男「どうか開けておくんさい、御免なさいませ……え、誠に暫く、何時もお達者で。長「へえ……誰だつて忘れちまつた、何方でしたかえ。男「エ、私は角海老の藤助でございます。と云われて長兵衛は手を打ち、長「おう、違えねえ、こりやアどうも、すっかり忘れちまつた、カラどうも大御無沙汰になつちまつて体裁が悪いんでね、こんな処え来てしまつたんで、誠にどうもツイ……。藤「お内儀さんが、一寸長

兵衛さんに御相談申したい事があるから、直に一緒に来るようにという事で。長「お前さんの処は余り御無沙汰になって敷居が鴨居で往かれねえから、何れ春永に往きます。暮の内は少々へまになって、往かれねえから何れ……。藤「兎や角う仰しやるだろが、直にお連れ申して来いど、お内儀さんが仰しやるので。長「直にたつたつて大騒ぎなんで、家内に少し取込があるんで、年頃の一人娘のあまっちょが今朝出たつきり帰らねえので、内の女房も心配してえるんでね。藤「お宅の姉さんのお久さんは宅へ来ておいでなさいますよ、其の事に就いてお内儀さんが貴方に御相談があるので。長「エ、……お久がお前処に往つてるとえ。かね「あらまア本当に有難う存じます、何処へ参りましたかと存じて心配して居りましたが、御親切に有難う存じます……。お前さん直に往つて連れて来ておくれよ。長「じゃあまアなんだ……。直に後から往きますからお内儀さんへ宜しく。藤「直に御同道しろと申しましたから。長「直にたつたつて何んですから、直に後から参ります。左様なら宜しく。かね「何んだよお前、御親切に知らせて下すつたのに何故直に往かないんだよ。長「なぜつたつて此の形じゃ往かれねえ……。手前のを貸しねえ。かね「いやだよ私の着物がありゃしないよ。長「手前は宅に居るんだからこの半纏を着て居やアな。かね「そんなものを着ては居られません、お尻がまるで出てしまふよ。長「湯巻を締めてりやア知れないよ。かね「人が来ても挨拶が出来ないよ。長「面と向つて話をして、後へ退る時に立てなければ後びっしやりをすればいい。かね「おふざけでないよ。長「そんな事を云わねえで貸しな。と無理やりに女房の着物を引剥いでこれを着て出掛けました。

三

左官の長兵衛は、吉原土手から大門を這入りまして、京町一丁目の角海老楼の前まで来たが、馴染の家でも少し極りが悪く、敷居が高いから怯えながら這入つて参り、窮屈そうに固まらまて隅の方へ坐つてお辞儀をして、長「お内儀さん、誠に大御無沙汰をして極りがわるくて、何んだか何うもね……。先刻藤助どんにも然う申しやしたんですが、余り御無沙汰になったんで、お見連れ申すくれえでござえやすが、何時も御繁昌のことは蔭ながら聞いておりやす、誠に何んとも何うもお忙がしい中をわざ／＼お知らせ下すつて誠に有難うござえやす……。お久ア此処に打ッ坐つて、宅の者に心配を掛けて本当に困るじゃアねえか、阿母アはお前を探しに一の鳥居まで往つたぜ、親の心配は一通りじゃアねえ、年頃の娘がびよこ／＼出歩いちやアいけねえぜ、何んで此方様へ来てえるんだ、こういう御商売柄の中へ。内儀「それ処じゃアないよ、こうしてお前の事を心配して来たのだ、這入りにくがつて門口をうろ／＼していたが、切羽詰りになつて這入つて来たんだが、私も忘れちゃったあね、お前が仕事に来る時分、蝶々髻に結つてお弁当を持つて来たつきり、久しく会わないから、私も忘れてしまったが、此処へ来て、此の娘がおい／＼泣いて口が利けないんだよ、それからまアどうしたんだ、何か心配事でも出来たのかと、此娘が親の恥を申しまして済みませんけれども、親父がまだ道楽が止みませんで、宅へも帰らず、賭博ばかり烈しく致して居りますが、あすが日、親父の腰へ纏でも附きますよな事がありますと、私も見てはいられませんが、漸々借財が出来まして、何うしても此の暮が行立たず、夫婦別れを為さうか、世帯をしまおうかというのを、傍で聞いて居りますと、私も子供

じヤアありませんから、聞き捨にもなりませんので、誠に申し兼ねましたが、お役には立ちますまいけれど、私の身体を此方さまへ、何年でも御奉公致しますから、親父をお呼びなすって私の身の代を遣って、借財の方が付いて、両親交情好く暮しの附きますように為てやりとうございます、私がこういう処へつとめをしていますすれば、よもや親父も私への義理で、道楽も止もうかと存じます、左様なれば親父への意見にもなりませんから、どうぞ私の身体をお買いなすって下さいと、手を突いて私へ頼むから、私も悔りしたんだよ、本当に感心な事だって、当家にも斯うやって沢山抱の娘もあるが、年頃になって売られて来るものは大概淫奔か何か悪い事を仕て来るものが多いんだのに、親の為に自分から駄込んで来て身を売るといふような者が又とある訳のものじヤアないよ、本当にこんな親孝行者に苦勞をさせて好い気になってぢヤア済まないよ、お前幾歳におなりだ、四十の坂を越して、何うしたんだねまア、此の娘に不孝だよ。長「え……誠にも面目次第もござえやせん、そんな事と知らねえもんですからね、年頃にもなつてやすから、ひょっと又悪い者が附いて意地でも附けて遠くへ往つちまつたかと思つて、嬢アも驚きやして、方々探して歩いて訊なんぞ、へえ、お久堪忍してくれ、誠に面目次第もねえ、汝にまでおれは苦勞をさせて。と云いさして涙を浮め、声を曇らし、長「実は己アお内儀さんの前だが、汝に手を突いて謝るくれえ親の方が悪いんだが、汝の知つてる通り、此暮は何うしても行立たねえ訳になつちまつたんだけれど、たった一人の娘を女郎に売りとくもねえし、世間へ対しても済まねえ訳だ、又本意でもねえから、然んな事を為たくもねえが、何うでも斯うでも此暮が行立たねえから、お久、親が手を突いて頼むが、何うかまア他家さまなら願え難いが、此方さまだから悪くもして下さるめえか

ら、此方さまへ奉公して、二年か三年辛抱してくれば、汝の身の代だけは一旦借金の方せえ付けてしまえば、己がまたどんなにでも働いて、汝の処は何んとかするが、然うしてくれよば己への良い意見だから、向後ふつたりもう賭博のばの字も断つて、元々通り仕事を稼いで、直に汝の身受を為に来るから、それまで汝奉公してえてくれ。

四

久「私は、固より覚悟をして来た事だから、何時までも奉公しますけれど、お前また私の身の代を持ってしまつて、いつものように賭博に引掛つてお金を失してしまつと、お母がまたあゝいう氣象だからお前に逆らつて、何んだ彼んだというとお前が又癩癩を起して喧嘩を始めて、手暴い事でもして、お母の血の道を起すか癩でも起つたりすると、私がいればお医者を呼びに往つたり、お薬を飲ましたりして看病する事も出来ませんが、私がいないと、お母を介抱する人がないのだから、後生お願いだ、私は幾年でも辛抱するからお前お母と交情好く何卒辛抱して稼いでおくんさいよ、よ。長「あいよ……あいよ……誠に何うもカラどうも面目次第もござえやせん、何んともはや、何うも、はア後悔しやした。内儀「御覧よ、こういう心だもの、実に私も此の娘には感心してしまつたが、お前幾千お金があったら此の暮が行立つんだよ。長「へえ私共の身の上でござえやすから百両もあればすつかり綺麗さっぱりになるんで。内儀「百両で宜いのかえ。長「へえ……。内儀「それではお前に百両のお金を上げるが、それというのも此娘の親孝行に免じて上げるのだよ、お前持つて往つて又うっかり使つてしまつては往けないよ、今度のお金ばかりは一生懸命にお前が持つて往くんだよ、よ、いいかえ、此娘の事だから私も店へは

出し度くもない、というは又悪い病でも受けて、床にでも着かれると可哀そうだから、斯う云う真実の娘ゆえ、私の塩梅の悪い時に手許へ置いて、看病がさせ度いが、私の手許へ置くと思つうと、お前に油断が出るといけないから、精出して稼いで、この娘を請出しに来るが宜いよ。長「へえ私も一生懸命になつて稼ぎやすが、何うぞ一年か二年と思つて下せえまし。内儀「それで二年経つて身請に来ないと、お気の毒だが店へ出すよ、店へ出して悪い病でも出ると、お前この娘の罰は当たらないでも神様の罰が当たるよ。長「え、それは当ります、へえ有難うござえやす。貧乏世帯を張つてるもんですから、母親と一緒に苦労して借金取のつけえ自分で言訳に往つて詫ごとをしてくれるんです……へえ、其代りお役には立ちやすめえから、一々小言を仰しやつて下せえやし、お久、お内儀さんも斯う仰しやつて下さるから何だが、店へ出てお客の機嫌気味の取れる人間じゃアねえが、其中にヤア様子も解るだろうから……己は早く家へ帰つてお母にも悦ばせ、借金方を付けて、質を受けて、汝の着物も持つて来るから。内儀「そんな事は宜いよ、江戸行の時に取りに遣るから……お前財布があるまい、お金も丁度他家から来たのがあるから財布ぐるみ百両貸して上げるよ、さア持つておいで。長「へえ、誠に何うも、有難うござえやす、じゃアお内儀さん直にお暇しやす。内儀「早く家へ往つてお内儀さんに安心させてお上げよ。長「じゃアお久、宜いか。久「お母さんによくいつておくれよ。長「あい、あい。と戸外へ出たが、掌の内の玉を取られたような心持で腕組を為ながら、氣拔の為たように仲の町をぶら／＼参り、大門を出て土手へ掛り、山の宿から花川戸へ参り、今吾妻橋を渡りに掛ると、空は一面に曇つて雪模様、風は少し北風が強く、ドボン／＼と橋間へ打ち付ける波の音、真暗でございます。今長兵衛が橋の中央まで来

ると、上手に向つて欄干へ手を掛け、片足踏み掛けているは年頃二十二三の若い男で、腰に大きな矢立を差した、お店者風体な男が飛び込もうとしていますから、慌て、後から抱き止め、長「おい、おい。男「へえ、へえ。長「氣味の悪い、何んだ。男「へえ……真平御免なさいまし。長「何んだお前は、足を欄干へ踏掛けて何うするんだ。男「へえ。長「身投げじゃアねえか、え、おう。男「なに宜しゅうございます。長「なに宜い事があるもんか、何んだ若え身空アして……お店風だが、軽はずみな事をして親に欺きを掛けちゃアいけねえよ、ポカリときめちまつてガブ／＼騒いだつてお前助かりヤアしねえぜ、え、おい、何で身を投げるんだえ。

五

男「御親切に有難うございます、私も身を投げる氣はございませんが、逆も行立ちません、もう思案も分別も仕尽しました。既に覺悟を極めたので、中々容易な事ではございませんから、お構いなく往らして下さいまし。長「お構いなくなつたつて、お構いなく往かれるかえ、人情としてお前の飛び込むのを見て、ア、然うかといつて往かれねえじゃアねえが、何んで死ぬんだよ、店者だから大方女郎のつかい込みで、金が足らなくて主人に済まねえつて……極つてらア、然うだろう。男「いえなに然んな訳じゃアないが、なに宜しゅうございます。長「宜しくねえよ、冗談じゃアねえぜ、え、おう。男「御親切は有難う存じます、私は白銀町三丁目の近卯と申します籠甲問屋の若い者ですが、小梅の水戸様へ参つてお払いを百金戴き、首へ掛けて枕橋まで参りますと、ポカリと胡散な奴が突き当りましたから、はつと思つてると、私の懐へ手を入れて逃げて行きましたから、何を為やアがると云つて、後で見ますと金が有りません

から、小僧の使ではなし、金を泥坊に奪られたといつて帰られもせず、と云つて何処へ往つて相談致すという処もございませぬから、身を投げるんで、大金の事でございませぬから何んな処へ参りまして相談を致しても無駄でございませぬから身を投げるのでございませぬ、何うぞお構いなく往らして。長「百兩奪られちまつたのかえ、何うも為ようがねえなア、冗談じゃアねえぜ、大店なんてえもなアおおかだなア、己ッちの身の上では百兩の金を借金を残らず払つて、好い正月が出来るんだが、本當に、大金を奪られるような者に払いを取りに遣るとはおおまかなもんだなア、お前もまた間拔じゃアねえか、胴巻へ入れて確り懐へ入れて置けば宜いのに、百兩といえは重え金額だ、本當に冗談じゃアねえぜ、だがの……金で生命は買えねえや、え、おう、何処へ相談しに往きねえな、旦那に逢つて然う云いねえ、泥坊に奪られて誠に面目次第もござえやせん、全く奪られたに違え有りやせん、え、おう何処へ往つて相談して見ねえな。男「へえ、相談したくも親も兄弟も無い身の上で、主人も手前ばかりは身寄頼りのない身の上だから、辛抱次第で行々は暖簾を分けて遣る、其代り辛抱をしろ、苟にも曲つた心を出すなと熱々御意見下すつて、余り私を蟲貞になすつて下さいませぬんだから、番頭さんが嫉んで忌な事を致しますから、相談も出来ませぬが、何うしても、私が女郎買でも為て使ひ込んだとしきやア思われませぬから、面目なくつて旦那さまに合す顔はございませぬ、なに宜しゅうございませぬからお構いなく往らして。長「いけねえなア、何うしてもお前死ななくつちやアいけねえのか……じゃア仕方かねえ、金で人の命は買えねえ、己も無くつちやアならねえ金だが、お前に出会ったのが此方の災難だから、これをお前に……だが、何うか死なねえようにしてくんなナ、え、おう。男「へえ、死なないうに致しますか

ら、お構いなく往らして下さいませ。長「お構えなくつたつて……じゃア往くから屹度死なねえとはつきり極りをつけてくんなよ。男「宜しゅうございませぬ、死にませぬ、く、へえ。長「冗談じゃアねえぜ。往くよ宜いか。と云いながらバタバタと二十歩ばかり駆けて来たが、何うも氣に成るから振り返つて見ると、其の若い者がバタバタと下手の欄干の側へ参り、又片足を踏掛けて飛び込もうとする様子ゆえ、驚いて引返して抱き留め、長「まア待ちなよ、待ちなてえに……それじゃア何うしても金が無けりやア生きて居られねえのか、仕様がねえなア、さア己がこれを……だが何うか死なねえような工夫はねえかなア……じゃアまア仕方がねえ……困るなア。男「お構いなく往らして、御親切は解りましたから。長「じゃア往くよ。とバラ／＼と往きに掛つたが、又飛び込もうとするから、長「仕様がねえなア此人は、冗談じゃアねえぜ、金が無くつちやア何うしてもいけねえのか。男「へえ、有難う存じます。とさめ／＼と泣き沈み、涙声で、男「私だつて死に度はございませぬけれども、よんどころない訳でございませぬから、何うぞお構いなく往らして、もう宜しゅうございませぬ。長「お構いなくつたつて往けねえやな、仕方がねえ、じゃア己が此の金を遣らう。

六

長「実は此処に百兩持つてるが、これはお前のを奪つたんじゃアねえぜ、己は斯んな傭の着物を着て歩く位の貧乏世帯の者が百兩なんて大金を持つてる氣遣はねえけれど、己に親孝行な娘が一人有つて、今年十七になるお久てえ者だが、今日吉原の角海老へ駆込んで、親父が行立ちませぬから何うか私の身体を買つておくんなさい、親父への意見にもなりませよ